九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# スミスの原理について

高木，暢哉

https://doi.org/10.15017/4362448

出版情報：經濟學研究. 23 (3/4), pp.15-36, 1959-04-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

# スミスの原理について

高木暢哉

わたしはかつて、「スミスの原理（Smithian Principle）」と呼ばれるものについて、述べてみたことがある。[註一] しかし概して、通貨学派や銀行学派の思想の流との関連においての考察であって、「スミスの原理」それ自体を問題として、細かく検討してみたわけではなかった。そこでここでは、考察をずっと狭く絞って、「スミスの原理」と呼ばれるものの前提や構造などを、少しく検討してみたいと思うのである。

註　一　『講座、信用理論体系』Ⅳ（日本評論新社、昭和三十一年）所収拙稿、同書、第二章「通貨学派と銀行学派」、九「スミスの原理」一六五ページ以下。堀経夫博士還暦記念論文集『古典派経済学の研究』（山本書店、昭和三十一年）所収「スミスにおける通貨主義と銀行主義」一三三ページ以下。

## 一

スミスの原理とは、銀行券の発行方法を規律する一つの指針をいうのであるが、真正手形の割引によれば銀行券の過剰

発行は起らない、という主張を内容とする。一口にいえば確かにそれに違いはないのであるが、それにはさまざまの規定や関係が前提となつており、一つの全体にまで組上げられたさまざまな因子の構築であつた。このことを思わない理解にとつては、それは、地金論争におけるイングランド銀行の理事たちの主張であるか、あるいは銀行学派の単なる拠り所という程度にしか浅く受けとられるよりほかは、なかつたのである。真正手形の割引にもとづく発券ということが、いいかえれば健全で確実な一つの短期金融の技術的形式が、他のさまざまの関連から切り離され、孤立化せしめられて、銀行券の迅速確実な還流ということだけで、過剰発行は完全に阻止されうるかに皮相に、解釈されるわけである。そこに見出される理解は、つまりは、ベンディクセン流の「古典的貨幣（klassisches Geld）」の程度を多く出るものではない。もしも、それだけのことでしかないのであるなら、すでにスミスの昔にソーントンが提起している次のような反論には、どのように答えれば、よいのであろうか。――もしも一個の商品にたいして、その販売のつど手形が振出されるときには、そのうちの一板しか真正手形とはいえないことになる、それらの手形のすべてが割引かれるとすれば銀行券は発行過剰にならないであろうか、と。(註1)

註1　Henry Thornton, An Inquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain, 1802, ed., Hayek, pp. 85-7, 渡辺・杉本訳『紙券信用論』五五―七ページ参照。

スミスが本来いおうとしていたことは、現実に販売される商品の実存を反映する手形の割引であるなら絶対に過剰発行にはならないといつた程度に、商品流通の実状から離れ去つた抽象的思弁ではなかつた。また短期金融である割引という

貸付技術上の形式にただもたれかかっていての主張でもなかったのである。商品流通に呼応する貨幣通流の現実についての一定の認識をもっていた。金属貨幣と銀行券とのあいだの貨幣構造上の関連把握のうえで、さらには産業資本の運動や構造、および銀行における支払準備の問題のごとき運営基点の確認に立って、上述のように、真正手形の割引による発券の必要を説いていたのである。しかしながら、こういったことは、これから明らかにすべきことなのである。ともかくも、スミスがどういう言葉で述べているかを、まずみておく必要があるのである。

「ある銀行が、ある商人またはある種の企業にどれほどの貸付をなすことが適当であるかというに、それはかれが取引に用いる資本の全部でもなく、またその相当の部分でもなくして、ただそのうちの一部分、かれが貸付を受けない場合に、かれの手許に不使用のままに、随時の請求に応ぜんがためのレディ・マニ（ready money）として保有せねばならない部分に限られるものである。銀行の貸付ける紙券の額がこの価値を超過しないならば、それは、その国に紙券がなかったならば必ず流通するであろう金銀の価値を超過することは決してありえない、それは、その国の流通界が容易に吸収し、使用しうる量を超過することは決してありえないのである」（Adam Smith, Wealth of Nations, ed., Cannan, Vol. I, p. 287. 大内訳『国富論』二ノ五七―八ページ）。

「銀行が、商人のために、真正な債権者が真正な債務者にたいして振出した真正な手形を割引き、その手形は、満期になるや、その債務者によって間違いなく支払われるものであるならば、銀行がかれにたいして貸付ける金額は、しからざる場合にかれが手もとに不使用のままに、随時の請求に応ぜんがためにレディ・マニとして保有せねばならぬ価値の一部分

にすぎない。その手形が満期になつて支払がなされると、さきに貸出された価値は利子を伴つて銀行に復帰する。もし銀行の取引がこういう得意先だけに限られているならば、銀行の金庫は、あたかも、一本の流れはつねに外に向つているが、いま一本の流れはそこから流れ出たのと完全に同量の水を注入するようになつているので、ことさら気をつけて注意をしなくとも、そこにはつねに同じくらい、またはほとんど同じくらいの水が溜つている溜池のようなものである」（ibid., p. 237. 二ノ五八ページ）。

右を読んで第一に気づくこととして、「その国の流通界が容易に吸収し、使用しうる量」、または「その国に紙券がなかつたならば必ず流通するであろう金銀の価値」ということが、記されているということである。その上で、順調な還流を保証する真正手形の割引による発行ということが語られていることに、注意されねばならない。次に、銀行の貸付ける紙券の額は、産業資本家が「手許に不使用のままに、随時の請求に応ぜんがためのレディ・マニとして保有せねばならない部分に限られる」必要があると、いつていることだ。この部分に限られるときには、さきの「金銀の価値」を銀行券の発行量は超過することがない。どうしてそういうことになるのか。スミスのいうレディ・マニという概念が問題であつて、このような中間項が、スミスの原理の理解にとつては、解明を要する論点となつてはさまつている。それと、最後の、真正手形だけを割引けば、貸付の限度はおのずから守られて、還流は順調であり過剰とはならない発券となるという主張が、おのずから結びついてくるわけだ。少くとも以上の三点が、上述のスミスの論述を構成する主要な三つの柱であることに気づくことであろう。その一つ一つを確かめてゆけば、スミスの原理の構造や内実を正しくとらえることができるに相違

あるまい。

## 二

マルクスは『経済学批判』において、スミスは「流通する鋳貨の分量に関する問題を黙って片づけている」と評したことがある。しかしその自用本Iにおいては、「これは正確でない。アダム・スミスは、むしろ二、三の場所において、この法則を正しく表現している」と註記しているのであって（Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, M-E-L Inst., S. 165. Fußnote. 宮川訳、二二四―五ページ）、『資本論』では、次のような補足がなされていた。『批判』でなした評語は、「ただA・スミスが貨幣を職掌として（ex officio）取り扱っているかぎり妥当する。だが時おり、例えば経済学の旧い体系を批判する場合に、かれは正しいことを語っている」と（Das Kapital, M-E-L Inst., Bd. I, S. 128. Fußnote. 78. 向坂訳『資本論』一ノ二三四―五ページ）。そして一つの引用文をもって、このことを示しているのである。要するに「二三の場所で」、「時おり」スミスは貨幣の流通必要量についての正しい認識を披瀝しているということになる。「その国に紙券がなかったならば必ず流通するであろう金銀の価値」、または「その国の流通界が容易に吸収し、使用しうる量」というスミスの言葉について、さきほど注意を向けてきた。それはスミス流に表現された流通必要量の概念ではないかと思うのである。もう少しくスミスの言葉について、みてゆくことにしよう。

「ある国において年々売買される財貨の価値は、それを適当なる消費者に流通分配するために、一定の貨幣量を必要とす

るが、それにはそれ以上が必要でない。流通の流れは、それを充すに必要なだけの量は、必ず自分のところに引き入れるけれども、それ以上は必ずこれを拒む」(Smith, ibid., Vol I, p. 407. 三ノ二八ページ)。

「かりに、ある特定国の、ある特定のときに、その流通貨幣の総額は一〇〇万ポンドであるとせよ、そしてこの額は、このとき、かれらの土地および労働の年々の生産物の全額を流通せしめるに充分であるとせよ。次に、その後しばらく経って、多くの銀行および銀行家が一〇〇万ポンドに達する持参人払いの約束手形を発行し、随時の要求に応ぜんがために、金庫中に二〇万ポンドを準備しておくと仮定せよ。しからば、金銀八〇万ポンド、紙券一〇〇万ポンド、金紙合計一八〇万ポンドが流通界に留るであろう。しかるに、この国の土地および労働の年々の生産物を流通させ、そしてしかるべき消費者に分配するために従来必要としたものは一〇〇万ポンドにすぎなかつた、そしてこの年々の生産物は、銀行のかくのごとき操作によつて直ちに増加するものではない。だから、こういう操作が行われた後にも流通上必要なものは一〇〇万ポンドにすぎない。売買される財貨そのものは従前に比して精密に同量なのであるから、それを売買するにも従前と同量の貨幣で充分なわけだ。流通の水道(channel of circulation)は――こういう表現がもし許されるならば、精密に従前どおりである。そしてわれわれの想定によれば、この水道を満すには一〇〇万ポンドでたくさんであつた。すなわち、この水道にこれ以上の額が注ぎこまれるならば、その分はこの中で流通することができず、どうしても溢れ出さずにはいられない。ところがいまや一八〇万ポンドがこれに注がれた。そこで、八〇万ポンドはその国の流通に使われることができる以上のものとして、どうしても溢れ出さなければならない。そしてこの額は、国内では使われえないけれども、されば

とて遊ばせておくには余りにも貴重である。そこでそれは国内では見出すことのできない有利な用途を求めんがために、外国に送られる。しかし紙券は外国に行くことができない。……したがつて八〇万ポンドに達する金銀が外国に送られるであろう、そして国内流通の水道は従来それを満していた一〇〇万ポンドのこれらの金属をもつてではなく、一〇〇万ポンド紙券をもつて満されるであろう」（Smith, ibid., Vol. I, pp. 276-7. 二ノ三七―九ページ）。

流通必要量法則についての認識が、銀行券による金銀貨幣代替の論拠とされているのを見ることであろう。もつとも、銀行券によりとつて代られ流通界から排出されることになつた金銀貨幣が、もつぱら国外に流出すると説かれている点については、問題があるが。

流通界から排出された金銀貨幣が、そのまま国内の人々の手に保蔵される場合がある。このことをみないで、スミスは直ちに、金銀は国外に持出されるものとみてゆくわけである。その国外についていえば、国外の国々にも、それぞれの事情によつて規定される、それぞれの貨幣流通必要量があるはずだ。他国の流通にとつては必要がなくなつて排出された金銀が、持ちこまれたとしても、必要量にして増大しないかぎりは、流通に受容されうるわけがない。流出した貴金属は、ここに宙に浮くことになるはずだ。しかし、このようにみてスミスを批判するのは、必要量法則が立脚する本来の立場である均衡論的事後の見地にこだわつて、真実にスミスがいおうとしている生産力の立場、いいかえれば経済発展の立場からの刮目すべき洞察に目をふさぐという結果になる。

デッド・ストックである流通貨幣のキャピタル・ストックへの転化ということに、銀行券が流通を代替した金銀貨幣の

海外への輸出ということの意義があつた。金銀鋳貨の維持には費用を要する。この空費を紙券でおきかえることによつて節約するばかりではなしに、この節約によつて浮いた金銀を海外に輸出し、生産に必要とされる諸資材を購入することによつて、それを生産的資本に転化する。これがスミスが狙いとしていた目標である。単に貨幣流通の次元に立つてだけ物をみるところの考察ではない。資本の運動の見地に立つている。生産的資本の拡大・蓄積を目指していての、流通必要量についての認識、または銀行券による流通貴金属貨幣の置換の必要の主張にほかならない。流通の必要を越える過剰な貴金属は、単に国内に退蔵されるだけであつてはならぬ。海外に輸出され、生産に必要な資材を獲得し、それが既存の生産資本に附加されるので、再生産規模の拡大となる。貴金属はもちろん世界貨幣としての機能を、ここではする。それは資材が購入されるがわの国にとつては、外部からの需要の拡大という意味をもつて現われる。その国の再生産の構造に変更が要求されるわけであり、したがつて流通必要量もまた変化しうることになる。資材を輸入する方の国についても、それによつて再生産規模は拡大され、流通必要量は結果として増大することになるであろう。つまりは、紙券でもつて流通する金銀貨幣をおきかえることは、国際貿易を発展させ、国々の再生産規模を拡大へと導く。このことを目指していてのスミスの右のような主張であつたことを看過すべきではないのである。加えてここに注意されなければならないことは、そういうスミスの再生産規模の拡大という最終目標が、金銀の輸出による生産用資材の購入という貨幣資本の運動をもつて、発端が切り開かれるということだ。

スミスが生産資本の循環の立場から、再生産の事態を眺めていることは疑いない。しかし生産資本・商品資本・貨幣資

本の各循環の有機的統一が、資本制再生産の現実である。とりわけ、貨幣資本の循環が注目されるべきで、貨幣に化体された剰余価値の取得増大にこそ資本制生産の動因はある。このことのために、生産資本の循環の拡大のためには、なによりもまず貨幣が、貨幣資本の資格において前払・投入されるのでなければならない。貨幣資本の前払をもつて切り開かれるはずの生産資本の循環が、スミスのここでの論述において明示されているというのではないにしても、実のところすでに示唆されているのである。なぜにこういう問題を、いまこのところでわたくしがとくにいうかといえば、（四）のところで述べるレディ・マニや手形割引の問題に関連をもつてくるからである。資本としての貨幣の運動の見地からの見透しをスミスは、流通必要量の概念について、また手形割引による発券方法の問題についても、持つていたように思えてならない。

## 三

ともかくもふたたび元へと帰ろう。金銀貨幣にとつて代る銀行券の分量は、そうでない場合に流通するはずの金銀貨幣の分量にしたがう、すなわちここでも必要量の法則が貫いてくる。どうしてそういうことになるかという保証の機構を、スミスが兌換に見出していることが注意されるのである。次のように述べていた。

「ある一国において、容易に流通しうる各種紙幣の総額は、それが代位する金銀の価値、言いかえれば、もし紙の貨幣が全くないとしてそこに流通するであろう（交易は不変と仮定して）金銀の価値を、決して超えることはできない。……か

りに、ある時に、流通する紙券がこの額を超えたとせよ、この超過分は外国へも輸出することができず、国内の流通にも使われることができないのであるから、それは、直ちに金銀と引換えられんがために銀行に復帰せざるをえない。多くの人々は、国内の取引をなすのに必要以上の紙券があるということを直ちに感知するけれども、かれらはこれを外国に輸出することができないので、直ちにその支払を銀行に要求するであろう。……だから、この余分の紙券の全額だけは即時に銀行にたいして取付けられるのである、そしてもしも銀行がこの場合、支払に多少の困難または逡巡の色を示すならば、その取付はいつそう巨額に達するであろう。」(Smith, ibid., Vol. I, pp. 283-4. 二ノ五〇—一ページ)。

一般的な貨幣流通についての法則である流通必要量法則は、銀行券の流通の場合にも貫かれる。そうならしめる機構が兌換であつた。支払約束手形である銀行券であるので、それが支払を約束する債務は、支払手段である金銀貨幣でもつて履行されねばならない。銀行としてはこの兌換に少しでも逡巡の色をみせることが許されない。みせれば取付はいつそう巨額に達すると、スミスはいつている。それは、銀行券が金銀貨幣を支払手段基礎とする信用貨幣である以上必然的な事態である。流通する銀行券における内実と根拠とを、スミスはいみじくも洞破していたわけである。マルクスがスミスの信用貨幣に関する見解を「独創的」であると評価し、「深刻」であるといつた理由が分るのである。

銀行券が流通必要量以上に発行されるときには、右のような関係で、支払手段現金の銀行における保有が減少せざるをえない。支払手段現金の存在が基礎となつていての信用貨幣である銀行券の創出・発行であつた。兌換のための貴金属準備は、発券銀行業務にとつての起点である。またその間を通じ、終始注意を寄せなければならぬ目標である。兌換があや

うく思われるような場合に、追加的に発券する銀行があるはずはない、もちろん発券という仕方で割引いたり貸付けたりすることはない。兌換を守るということは、発券する銀行にとつては、至高の実践的指針である。銀行が過剰に銀行券を発行するときには、その兌換に応じうるために、追加の金銀が銀行の金庫に用意されねばならぬことについて、スミスは注意を促した。かくして、「ますます迅速に空虚となる銀行の金庫を補充するための新らしい金銀を探し出す困難を増大せしめ、それによつて、銀行の経費をもまた必然に増加せしめる」と、スミスはいうのである。(Smith, ibid., Vol., I, p. 284. 二ノ五一—二ページ)。

いうまでもなく、スミスの考方からするならば、鋳貨としての金銀は、その維持に費用を要するデッド・ストックでしかない以上、このデッド・ストックである金銀鋳貨の流通に代えて銀行券を発行し、金銀の方は外国に送り出して生産用資財を手に入れることにより、一国の再生産規模が拡張されうることを願う。銀行業に寄せるスミスの期待も、実は、こういうところにあつたのである。「銀行事業上のもつとも思慮ある活動が一国の産業の発達を促進するのは、それがその国の資本を増加させるからではなくして、そういう活動のない場合に比してその資本の大部分を有効にして生産的に利用させる点にある。……ある国に流通する金銀貨は、その国の土地および労働の生産物を年々流通させ、しかるべき消費者に分配する手段たるものであるが、それはまた、かの商人の手許準備金と同様に、全然死せる資財である。それはその国のキャピタルの中でも大切な部分にして、しかもその国のため何物をも生産しない資本である。しかるに銀行の思慮ある活動は、この金銀の大部分の代りに紙券をおくことによつて、この国をしてかかる死せる資財の大部分を変じて有効にし

て、かつ生産的な資財、すなわちその国のために何物かを生産する資材となすことをえしめるのである」(Smith, ibid., Vol., I, pp. 303-4. 二ノ八七—八ページ)と。

このような生産的な社会的使命が託された銀行業自身が、過剰に発行された銀行券の兌換に備えて、金銀のデッド・ストックを過充に保有すべきであるはずはない。さか上つて、その原因にまで考を及ぼすならば、兌換が殺到するようにまで過大な発券は、なしてはならない。過大な発券を制止しうるような発行の方法、つまりは発券銀行業務における行動の実践的基準が、ここに必要とされてくることになる。そのような理論の関連において浮び上つてくるのが、真正手形の割引という銀行取引にとつての実務的指針ではなかつたかと、考えられることである。

過大な支払手段準備現金の保有という死重を避けようと思えば、銀行券を過大に発行すべきではない。過大にはなるはずのない銀行券の発行というのは、流通の必要量に合致する場合においてのことであつた。流通必要量という一般的貨幣流通の法則がまず根底にあり、しかもそれが信用貨幣である銀行券の上にまで貫かれて実現されるという認識に立つて、兌換をひきおこすことのない、いいかえれば支払準備としての金銀の過大な死重を避けうる発券の方法ということを考えてみるとき、ここに自然に留意されてくるのは、銀行からの借主が返済のために銀行券をその銀行に持ちこむという還流の機構以外ではありえまい。借主は銀行にたいして、期限の来た借入れの債務を履行すべきであるという貸付取引上の義務を負う。しかし同時に、その銀行がさきに発行していた銀行券を所持しているので、この銀行にたいし支払手段である金銀の引渡しを要求しうる権利をもつ。この債権でもつて、借入れの債務は相殺されうる。それが銀行券でする借入れの返

済の内容である。債権が債務と相殺されて、兌換という銀行券に内在する貨幣的債務の現実的貨幣による支払は、発現してこない。こういう債権債務相殺の機構が根を下していて、つまりは順調で確実な銀行券でもってする返済が行われているという条件のもとでは、金銀が兌換にもとづいて銀行の外部に流出するということは起らぬ、したがってこのことのために、とくに兌換のための金銀の準備を手厚くしておく必要もない。

スミスの時代に銀行が主として用いた貸付の形式は、いいかえて発券の主たる方法は、商業手形の割引ということであつた。結局は最後に、確実に銀行券が支払われることになる真正な商業手形にたいする割引という方法による発券の場合は、手形債務者と銀行とのあいだにおける債権債務の相殺は確保されうる。すなわち金銀の流出をともなう兌換の請求は、これだけの前提のもとでは起りえない。銀行からは、一方では、新らしい割引貸付によつて銀行券は絶えず出てゆくことには違いはないが、その他方、手形債務にたいする確実な履行によつて、銀行券は銀行のもとへとまた絶えず帰つてくる。「銀行の金庫は、あたかも、一本の流れはつねに外に向つているが、いま一本の流れはそこから流れ出たのと完全に同量の水を注入するようになつているので、ことさら気をつけて注意をしなくとも、そこにはつねに同じくらい、またはほとんど同じくらいの水が溜つている溜池のようなものである。こういう銀行の金庫を補充するには、全然ないしは、ほとんど経費がかからない」と、スミスがいつているのは、このような事態を上述のような条件を前提として述べているものとみるべきであろう。真正手形の割引という確実で短期の貸付融通の形式を、過剰発行にならないための指針としてスミスは推奨するわけであるが、その前提としては、銀行券の流通にまで一貫して及んでくる流通必要量の法則がまず第一

にあり、さらには兌換というこれを実現せしめるための信用貨幣にとつての固有の機構が条件となつていることが、見落されるべきではないのである。右のような関連において、したがつて右のような意味において、真正手形にたいする割引発行ということが、いわゆるスミスの原理と呼ばれるものを形造る一つの要素的内実となることになつた。

流通必要量法則が前提となつていての真正手形の割引という発券にとつての技術上の指針である。真正手形の割引という貸付の短期的一形式が、それみずからの力にもとづいて、銀行券を必要量に合致せしめるのではない。必要量法則という基礎に立つていての割引発券というスミスの原理は、後にはとかく、単なる技術の問題というように皮相化されて、浅薄に理解されることになつた。イングランド銀行の理事たちが地金論争にあたつていうように。この短期的金融の一技術的形式は、いいかえると、固有に金融流通という上部構築において現われる実務的技術の手段は、即自的に、下方に向けて、商品流通にとつては対偶である貨幣流通の法則にまで逆におしあてられることによりそのまま同一であるというように、転倒して解釈されることになつた。スミスの原理にとつては中間的な環節をなすレディ・マニについての吟味がなされるならば、このような誤解はいつそう分明に確認されうるに違いあるまい。

## 四

最初に引用しておいたスミスの言葉にまで立返えつて、それをみることにしよう。流通必要量の範囲内に発券を止め、過剰な発券にならぬようにするには、借主である資本家が取引に用いる資本の全部でもなく、またその相当部分でもな

く、ただそのうちの一部分にのみ、銀行はその貸付を限るべきであつた。いいかえれば「かれ〔資本家〕が貸付をうけない場合に、かれの手許に不使用のままに、随時の請求に応ぜんがためのレディ・マニ（ready money）として保有せねばならない部分に」。真正な手形を割引くという仕方で銀行が貸付けるときには、そのときに発行される銀行券の額は、「そうでない場合にかれが手もとに不使用のままに、随時の請求に応ぜんがためにレディ・マニとして保有せねばならぬ価値の一部分にすぎない」。すなわち銀行券の発行量は、流通必要量に合一し、過剰な発券となることはない、というスミスの趣旨であつた。しかしながら、どうしてこういうことになるのであろうか。スミスにおいては、資本家の資本の一部であるというレディ・マニは、購買あるいは支払のために機能すべき流通手段貨幣としてとらえられているからである。資本家が保持するこの資本部分を社会的に集計すると、社会の流通が必要とする金銀貨幣の総量になる。したがつてレディ・マニに相当する資本部分に貸付の限度を定めるということは、金銀貨幣の必要量の範囲内に銀行券の発行を限り、これにおきかえるということになつてこよう。おきかえるにあたつて銀行がなすべき金融の形式は真正手形の割引であつて、この手形は満期になると間違なく支払われるものであるため、銀行の金庫は溜池のように、一方の流出は他方の流入により相殺されて、同じくらいの分量をたたえることになるわけである。

元来、流通する貨幣は、現実の流通にさいして、購買あるいは支払の時期の到来をまつて、大なり小なりの期間、その所持者のもとで待機・休息するものである。貨幣資本の運動には、購買または支払のための流通期間を必要とする。流入して来た貨幣資本は、資本家のもとにしばらくは止まり、次いで投下されるに及んで、そのもとを去る。これを貨幣それ

自身についていうならば、貨幣は人手をかえるとともに、新らしい所持者のもとで休息する。休息し流通し、流通して休息して止むことがない。休息期間の大小が、貨幣の流通速度を決定する因子になつている。流通する貨幣の所在はといえば、現実には休息貨幣の形態以外ではありえない。休息しつつ流通する流通貨幣を機能の面でみたものが流通貨幣という概念、しかしそれが休止する所在でとらえられるときには休息貨幣ということになる。休息貨幣というのは流通貨幣のメダルの裏にほかならぬ。休息貨幣として人々が保持する手許現金在高の社会的総計は、流通する社会における貨幣の総量に合一する。スミスがいうところのレディ・マニが、こうした休息貨幣の形態における流通貨幣、すなわち現金手許在高に関係するものであることが理解されてくるのである。

真正手形の割引による発券をスミスが説くのは、そうすることによつて発行された銀行券が、資本家が保持するレディ・マニにとつて代わりうることを考えてのことだつた。レディ・マニの社会的集計は、社会で流通が必要とする金銀貨幣の総計に等しい。つまりはそうして、銀行が創造する銀行券により、流通に機能しなければならぬ金銀貨幣はとつて代られるわけである。流通が必要とする金銀貨幣におき代つて出てゆく銀行券には、過剰発行ということはありえない。スミスにおけるレディ・マニの概念にはなおあいまいなものがあつて、それ以外の要素をも含まないわけではないのであるが、こうして流通手段としての現金保有に関係をもつ概念であることは疑いない。レディ・マニ（ready money）という言葉の訳語としては、「準備金」または「現金」という言葉が大内訳においては前後して用いられているが（二ノ五七および五八ページ）、現金手許在高の意味に読むべきであろう。

玉野井芳郎氏は、ここのところを、わたくしと同様に、資本家の手許における流通手段現金の意味に解されている。しかしそういうスミスの概念に加えられる氏の評価は、わたくしとは全く反対になるので、氏によれば、スミスが流通手段現金の意味においてレディ・マニという概念を用いているのは誤りであり、批難されねばならぬのである。「個々の資本にとってその流通貨幣資本の一部にほかならぬ準備金は、産業資本の再生産過程が必要とするところの、購買＝支払手段の準備金のための貨幣蓄蔵であって、明らかに流通手段としての貨幣とは異なる。むしろこの流通手段としての貨幣が流通からひきあげられ、ふたたび流通に投入されうる形態にある貨幣、すなわち流通手段とも現実に運転されている資本とも異なる資金にほかならない。この資金を、スミスはそのまま流通手段と同視するのである。そして、まさにこれによって、さきのスミスの論理が成立せしめられるのであった」（『講座、信用理論体系』Ⅳ「古典経済学の信用理論」二八ページ）と。スミスのレディ・マニは「準備金」と訳されて、「貨幣蓄蔵」と同じものに理解されている。玉野井氏における「資金」なる概念は、これだけではよくは理解できぬので、あまり立入ったことをいうべきではないが、右の引用文に従えば、流通手段とも現実に運転されている資本とも異なるもの、いいかえれば、流通手段としての貨幣が流通からひきあげられ、ふたたび流通に投入されうる形態にある貨幣のこと、それは明らかに流通手段としての貨幣とは異なる購買＝支払手段の準備金のための貨幣蓄蔵のこととされている。スミスにおけるレディ・マニは、玉野井氏によれば「資金」と呼ばれるべきであった。「この資金を、スミスはそのまま流通手段と同視するのである」という氏のスミスにたいする批難があげられることになる。しかし真実は上記のように、スミスのいうレディ・マニはそのまま流通手段の意味に理解されてよいも

のだ。スミスの正しいレディ・マニについての概念が正しく読みとられているのにもかかわらず、「資金」とか「準備金」とか「貨幣蓄蔵」とかという概念が外部から恣意に持ちこまれてきて、それは正しくないという氏の批判の言葉になつたもののように思われる。

資本主義的企業においては、資本は三つの形態をとつては捨てつつ運動する。貨幣資本・商品資本・生産資本という。同時化された生産の場合は、生産資本が運動し循環するかたわらで、商品資本や貨幣資本が同時にその機能を営む。三循環の統一である資本制再生産の過程である。これを貨幣資本の運動についてみてゆくと、貨幣資本の前払投入、すなわち貨幣による商品の購買でもつて生産資本の運動は導かれて商品資本が生産され、他方商品資本が販売されると貨幣資本が回流してくるという帰結になる。こうして流入する貨幣資本は、また流通を待機する一定の期間を終ると、ふたたび投入されて流通に出てゆくことになる。流通しては休み、休んでは流通する企業のもとにおける貨幣資本の流動である。それは流通に機能する貨幣であつて、その社会における総体が、流通に必要とされる貨幣の総量を形成する。機能し運動する企業資本の一部をなすところのレディ・マニは、商品流通を媒介する貨幣の社会的通流には不可分だ。社会における貨幣の通流を、生産的企業の資本の構成および運動の面においてとらえるならば、それは企業資本の一部をなすレディ・マニという存在形態で現われる。資本の運動の要素である貨幣というその一部は、流通という社会の平面においては流通貨幣の要素であり、したがつて流通必要量の部分をなすものは、つまりは資本の運動の内部における一要素でしかない。過剰発行にはならぬ銀行の貸付は、企業資本の一部でしかないレディ・マニに限られるべきであるというスミスの主張は、鋭

い洞察を含んでいる。資本制生産においての流通を動かすところの資本の運動という車軸が一本そこを通つていて、交叉して立体的に、資本の運動と流通とが有機的に総体をなす再生産構造についての認識が、スミスにはある。いつそう厳しく胸にせまつて、われわれの感銘を呼ぶことだ。もちろん資本の運動といつても、生産資本の循環に力点がおかれてのものであることは、いうまでもないが、貨幣資本の運動も、こうして看過されていたのではなかつたのである。

これまでは金銀貨幣で用意されていたレディ・マニは、銀行券によつておきかえられ、流通からは排出され、それは海外に送り出され、生産用資材をえることによつて、一国の再生産規模が拡大されることになると、スミスはいう。この場合の再生産規模の拡大が国外に送り出される金銀貨幣の前払によつて切り開かれるものであることは、さきにも指摘しておいたところである。生産資本の循環は、前払される貨幣資本投入の規模拡大にともなつて拡がつてゆく。流通から遊離した金銀を中心に、国際的視野を通じ、スミスはこれをみたわけなのである。もちろん、貨幣資本の前払規模の拡大が再生産の拡大へと導くといえば、国内においての方がむしろ手近かに現われることでしかない。遊離した現金をそのまま国内において従前の前払規模に加えて投入すればよい。あるいはそれを支払手段基礎にして、信用による買付の膨脹をはかることもできよう。そうしてここに、商業信用の規模が社会において大いに拡がるときには、これを対象としての銀行がおこなう割引信用もまた拡大に導かれうる。割引によつてえた銀行券を支払手段としての用意に用いての信用による購入が、さらに一段と拡大されないということはない。一国の外部から資材を購入する場合とは違つて、国内では価格が高騰する可能性は大きいのである。高騰しゆく価格の運動や、商品取引量の増大にともなつて、真正手形にたいして与える銀

行の割引貸付ですらが、膨脹に向わざるをえないであろう。累増しゆく貨幣資本前払の運動が、生産資本の拡大する循環を、いいかえれば再生産規模の拡大を導いてきたものであった。これには、資本制生産のもとでは投機がともない、産業過程はいつしかオーバー・トレーディングへと進んでゆく。産業過程がオーバー・トレーディングであつて、金融過程もまたオーバー・バンキングとなるのである。過剰発行にはならないというわけのものではない。スミスは確かにこのことを知つていた。「連合王国の両部における大胆な企業家のオーバー・トレーディングが、紙の貨幣のこういう過度の流通を来した根本の原因であつた」と書いている（Smith, ibid., Vol. I, p. 287. 二ノ五七ページ）。そこから、われわれが最初に読んだかれの著名な言葉が、続いて記されることになるわけだ。銀行の貸付が資本家の資本の一部、すなわちその手許におかれる随時の請求に応ぜんがためのレディ・マニの部分に限られるならば、流通必要量を越えて出る過剰な発券とはならないであろう、という。銀行券の発行は、流通する金銀貨幣の一部にとつて代るべきものなのである。そういう前提があつてここに課せられる真正手形の割引による発券という実践上の指針であつた。真正手形の割引であるなら、それだけのことで流通必要量に合一しうるという程度の理解ではない。ただ手形割引がオーバー・トレーディングに結びついて生ぜしめるオーバー・バンキングやオーバー・イッシュについて立入つてスミスが深くは述べないのは、スミスの住んだ時代の未熟によるものである。

スミスの住んだ時期は、まだマニュファクチュアの段階にあつた。しかしがなら、産業革命の急激な進行とともに、商業信用の基礎の上に立つ銀行信用もまた急速に発展し、これら信用は「再生産過程一般の加速」の手段になりえたととも

に、恐慌をもたらし、それを激化せしめることになつた。信用の管理や統制が時代の論題となるのである。数量説的に貨幣の流通への附加投入が一般的に物価の高騰へと導くという見解からは、貨幣数量の直接的管理を要求する声が上つてくる。少くとも銀行券の兌換は回復されるべきであるというのは、地金論者の主張であつた。ソーントンは一部ではこれに同じてはいるが、他方ではむしろ均衡論的に、流通必要量説においてみる流通構造把握の事後的見地にも立つのであつた。ソーントンを媒介として、地金論争における地金論者とイングランド銀行理事たちのあいだの見解の相違へと発展し、後には通貨学派と銀行学派との対立にまで分れる学説史の発展の起点としては、または地盤としては、以上のようなスミスによる見解が注意されねばならない。思えば、立返つてのスミスについての自省は、まことに重要であるというべきだ。

—一九五七・一二・二三—